大村市のまちなみ

郷土長崎県が誇るまちなみをレポートする「長崎県の美しいまちなみ」シリーズの第２回目として美しいまちづくり重点支援地区に認定されている「大村市」のまちなみを紹介しよう。

１．大村市の歴史について

戦国時代にこの大村の地を支配していた大村氏が戦国大名としての地歩を固めたのは、鎌倉期の地頭から発展し、島原の有馬氏から養子に入った純忠の代であった。日本史上初のキリシタン大名である純忠は入信後の翌年1564年（永禄７年）に三城城（さんじょうじょう）を築き、大村湾一帯を支配下に置いた。純忠の後を継いだ喜前（よしあき）（初代藩主）は1599年に玖島城（くしまじょう）を築き、その周辺に上級家臣の屋敷を造らせた。以来、大村藩はキリスト教の禁教により幾度も藩存続の危機を迎えたが、明治維新を迎えるまで一度も戦禍に遭うことなく、大村藩２万７千石の城下町として栄え、三城城と玖島城の二つの武家屋敷街が残された。

幕末においては大村藩勤王派三十七士の倒幕・維新に向けた活躍ぶりが高く評価され、その中心人物の一人として活躍した楠本正隆は後に新潟県令(知事)、東京府知事、衆議院議長などを歴任している。このほか、女子教育や知的障害児の教育と福祉を切り開いた石井筆子、世界的な原子物理学者としてわが国最初の文化勲章を受けた長岡半太郎、長崎医学校（現長崎大学医学部）学頭や明治政府の初代衛生局長として近代医療制度に貢献した長与専斎など、数多くの人材が輩出している。

市内には、これらの歴史を物語る史跡やエピソードが数多く残され、大村の歴史・文化を今に伝えている。

２．上小路（うわこうじ）周辺地区について

（１）重点支援地区認定までの経緯

大村の長い歴史を最も色濃く残しているのが上小路周辺地区の武家屋敷街である。上小路周辺地区とは大村公園（玖島城跡）前の国道34号線と長崎街道に挟まれた玖島を中心とした一帯を指す。

この地区にある武家屋敷街には、当初、玖島城を中心に本小路、上小路、小姓（こしょう）小路、草場小路、外浦（ほかうら）小路の五つの通りが造られ「五小路」と呼ばれた。後にその周囲にも屋敷が建ち、明治維新で活躍した楠本正隆、渡辺清・昇兄弟、稲田又左衛門らを輩出した岩船武家屋敷をはじめとして、日向平（ひなたびら）武家屋敷、上下（かみしも）久原（くばら）武家屋敷、百人衆武家屋敷などの武家屋敷ができた。この武家屋敷街は、城に向かって伸びる緩やかな斜面に造られたことから、階段状に石垣が築かれ、この石垣群が大村の

上小路周辺景観形成地区
（おおむら浪漫ガイドブックより）

旧楠本正隆屋敷（写真提供：大村市商工観光課）

武家屋敷街の主要な景観をなしている。

このうち、岩船武家屋敷街の中にある楠本正隆屋敷の売却計画をきっかけに大村市がこれを買収し、財団法人日本ナショナルトラストに武家屋敷地区の成り立ちや建物・遺構などの詳しい調査を委託した。同市はまたこれと並行して2002年11月から03年11月までの間、地域住民や関係者とのワークショップ（体験型講座や研究集会）を行い、その検討結果を踏まえ04年３月に「上小路周辺景観形成地区　方針と基準」を作成し、同年４月に当地区を「上小路周辺景観形成地区」に指定した。

また、当地区は04年４月に、県の「長崎県美しいまちづくり推進条例」により、03年８月の島原市「島原中心部商店街地区」や対馬市「厳原城下町地区」に次いで重点支援地区に認定されている。

（２）上小路周辺地区の散策

まず、大村公園（玖島城跡）を背にし、国道34号線を渡って本小路武家屋敷通りから小路を順番に歩いていこう。

本小路武家屋敷通りは玖島城大手門から伸

びる大通りで、往時は大村藩の藩校である五教館(こうかん)や藩会所、家老級宅の広い屋敷、大村牢などが並んでいた。五教館は江戸前期から明治に至る203年間にわたり藩内子弟の育成が行われたところで、現在は大村小学校が建っている。五教館とは、「君臣義あり、父子親あり、夫婦別あり、長幼序あり、朋友信あり」の五倫の道を教える学校という意味である。この五教館御成門(おなりもん)は五教館に付属していた建物のなかで、唯一現存する遺構であり、歴代の藩主が来校されるときに使用された門である。普段は閉ざされているが、入学式と卒業式の時のみ、生徒はこの門をくぐることができる。この五教館のすぐ隣には前述の石井筆子の像が建立されている。

五教館御成門（写真提供：大村市商工観光課）

石井筆子の胸像（写真提供：大村市商工観光課）

次に歩いた小姓小路武家屋敷通りは今でも通りの両側に石垣が連なり、とくに、中尾元締役旧宅は日向平武家屋敷街の当時の景観を最もよく残している。

中尾元締役旧宅（写真提供：大村市商工観光課）

小姓小路（写真提供：大村市商工観光課）

次の上小路武家屋敷通りは、本小路の入口から針尾家家老屋敷跡を経て長崎街道へ続く約１キロの武家屋敷街で最も長い通り。最初は尾上小路(おのうえこうじ)と呼ばれていたが、いつの頃からか上小路と呼ばれるようになった。幕末に大村藩の剣術指南役として江戸より招かれた神道無念流の剣豪斎藤歓之助が開いた斉藤道場

や、大村藩を代表する浅田家家老屋敷など37戸の屋敷があった。さらにこの通りを上ると、旧楠本正隆屋敷がある。屋敷・庭園ともよく残され、大村の武家屋敷の貴重な遺構として公開されている。

浅田家家老屋敷跡（写真提供：大村市文化振興課）

最後にこの武家屋敷街の最も北に位置する草場小路武家屋敷通りを歩いた。屋敷は５戸と短い小路だが、袋小路とも呼ばれるように道は幾重にもカギ形に曲がり、防衛手段としての道成りの特徴を持つ。また色とりどりの石積みを漆喰で塗り固めた飾り塀「五色塀」が最も美しく残る小路である。さらにこの小路の途中には旧円融寺庭園や大村家の祭神である春日神社がある。円融寺は1652年に４代藩主大村純長によって徳川歴代将軍の霊を祀るため創建された寺院である。明治になって廃寺となり、現在は護国神社になっている。境内奥の斜面には、江戸時代初期様式で造られた庭園が残されている。立石を組み合わせた枯山水の庭園で、1976年には国の名勝に指定されている。

このように上小路周辺地区を散策するなかで、「おおむら歴史の散歩道」という案内板を

草場小路（五色塀）（写真提供：大村市商工観光課）

旧円融寺庭園（写真提供：大村市商工観光課）

よく目にした。当地区の地図と史跡の説明が分かりやすく表示されており、この界隈を周遊するうえで大いに役立った。

（３）まちづくりの推進

2004年４月の上小路周辺景観形成地区指定を機に、大村市では美しいまちなみを活かしたまちづくりに取り組んでいる。最後にこうした美しいまちづくりに向けた行政や民間の取組みについて簡単に紹介しておこう。

大村市による前述の指定に伴い、当地区において建築物の新築、改築等を行う際には市

への届け出が必要となり、「上小路周辺景観形成地区　方針と基準」により申請者とデザイン等の協議を行うようになった。

また歴史的環境を活かしながら居住環境の改善を進めるため、04年10月から12月までの間、ワークショップを行い、05年３月に「上小路周辺地区街なみ環境整備事業計画書」を作成した。

さらに同市は06年度から「大村市街なみ整備助成事業補助金制度」を創設し、地区内の建物などの整備・改善費用を助成している。

一方、市民の側でも美しいまちづくりへの取組みが着実に進められている。04年２月に設立された「大村武家屋敷景観づくりの会」（会員数40数名、周辺地区も含む10町内会長が会員として参加）は、毎月１回定例会を開催しており、大村の歴史についての勉強会・歴史のまち案内人養成講座への参加、先進地区の視察、ケーブルテレビでの広報、地区内の清掃活動などを行っている。

大村市では、今後のまちづくりにあたって、地域住民をはじめとする市民の地域ぐるみの景観作りへの参加、地域団体の結成、自主的な活動などに対し支援を行い、市民の意見を反映した市民参加のまちづくりを進めることにしている。また、行政の立場から引き続き良好な景観形成の誘導や公共空間の整備を通じて魅力的な公共空間の創出に努め、住民と一体となった快適で個性的な街なみの形成・保全を推進していこうとしている。

（橋口　不二郎）

似田邸周辺美化活動（写真提供：大村市都市計画課）

観光ボランティア活動風景（写真提供：大村市商工観光課）